

はじめに

本報告書は令和3年度滋賀大学データサイエンス学部社会調査実践演習Ⅰ・Ⅱで行った分析結果をまとめたものである。分析には、彦根地区雇用対策協議会との共同研究で行った「湖東地区で働く若手従業員の職場環境と生活に関する調査」のデータを用いている。

本報告書には6編の論文が収められている。まず第1章に調査の概要について示した。続く第2章から第7章は学生たちの各論文であり、最後に資料として調査票を付している。

第2章の泉論文は、新型コロナウイルスの流行前後における社員のコミュニケーションの量に着目し、その量的な変化が職場の人間関係にどのような影響を与えたのかを明らかにしている。その結果、コロナ流行前後で、「仕事に関する会話」の量が減少した人ほど、職場での人間関係が悪くなったことが明らかになった。

第3章の江崎論文は未婚者の結婚願望について、仕事への意欲との関連で分析をしている。男女別に分析した結果、仕事への意欲と結婚願望については男女とも関連が見られなかった。一方で男性であれば長時間働いている人ほど結婚願望がない、女性であれば高卒である人に比べて、高校より上の学歴のある人は結婚願望がないという結果を得ている。

第4章の北田論文は仕事場を感じるマイナスのギャップについて分析をしている。主な結果として、上司との信頼関係が築けていないと回答した人ほど会社への印象が悪くなった、勤務時間を長いと回答した人ほど会社への印象が悪くなったということが明らかとなった。一方で、体育会経験や学んだことを活かせるかどうかは、マイナスのギャップとは関連が見られなかったことを指摘している。

第5章の林論文は、地元への定着に影響する要因について、居住地域の評価点との関連で分析を行っている。主な分析の結果、居住地域の良いと思うところの選択個数が多いほど定住意向が高まる事がわかった。また詳細な分析の結果、「交通の利便性」「地域の人との関係」が良いほど、定住意向が高いことが分かった。

第6章の村上論文は、会社満足度について上司との関係性との関連に着目して分析を行っている。分析の結果、残業の命令が多いことが上司との関係性において負の関連をしており、信頼関係を築けていることが正の関連をすることが明らかとなった。

第7章の山本論文は、職場に求める改善点について回答された自由記述データを使用し、社員が会社の休暇制度を利用する上での難点を分析したものである。テキスト分析の結果からは、上司との人間関係と、休暇制度利用の関連性が示されており、職場の人間関係が職場定着にも関与する可能性を見出した。

以上の報告の中には、分析方法や結論について、さらなるブラッシュアップが必要なものも含まれているため、実際に応用するにはさらに検討が必要であることには注意されたい。

この報告書をもって、受講生は質問票の検討、実査、データクリーニング、データの分析、そして報告書の作成までのすべての行程を一通り経験し、社会調査の基礎的なトレーニングを受けたことになる。今後、さらなる社会調査の経験を積み、社会調査士としてそ

の能力を社会に還元してもらいたいと願っている。

データサイエンス学部 准教授 伊達平和
データサイエンス教育研究センター 助教 堀兼大朗